

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24390499

研究課題名(和文) NICUから在宅への移行を支える看護実践能力育成プログラムの開発

研究課題名(英文) The development of an Education Program for NICU Nurses on the Transition from NICUs

研究代表者

中山 美由紀 (NAKAYAMA, MIYUKI)

大阪府立大学・看護学部・教授

研究者番号：70327451

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はNICU看護師を対象としたNICUから在宅への移行を支える看護実践能力育成プログラムの開発を目的として実施した。プログラムの開発のためにNICU看護師にインタビューを行い、プログラムの内容を検討し、評価のために家族看護実践能力評価尺度を作成した。38名のNICU看護師に対してプログラムを実施し、その効果を査定した。その結果、参加者の家族看護実践能力は向上し、看護実践課題の達成度も向上することができた。これらから本プログラムの効果を確認することができた。今後、さらに洗練させたプログラムを検討していくことが必要である。

研究成果の概要(英文)：Many Japanese NICUs encounter serious problems with long-term hospitalization. Our previous study revealed that NICU nurses do not have enough knowledge and skills regarding the transition from NICUs to homes. The purpose of this study was to clarify the effect of an education program on this transition for NICU nurses. We recruited nurses who had practical nursing experience for families whose infants were transitioning from NICUs to homes. We conducted an education program that included 8 sessions offered over 2 months and 2 follow-up sessions. Thirty-eight nurses completed this program. Significant changes in family nursing practice were observed. At the time of the last assessment, nurses used more knowledge and skills in the education program than they did at the previous assessment. It was verified that at the application of this education program for NICU nurses was effective.

研究分野：看護学

キーワード：NICU 在宅移行支援 看護実践 教育プログラム

### 1. 研究開始当初の背景

全国的に、重症妊婦や新生児の緊急治療を行う施設の体制が不十分である問題が指摘されている。妊婦や新生児の搬送システムなどが整備されているが、医師不足の問題や新生児集中治療室（以下、NICU）のベッド数の不足から十分な受け入れができていない現状にある。NICUのベッド数の不足の要因の一つとして、長期入院の問題が指摘されている。入院が長期化する理由は病状不安定であることが最も多いが、在宅で介護する家族の不安や負担から在宅に移行することができない理由により入院が長期化している問題も多い。家族の不安や負担の課題に対しては、早期から在宅を見通したNICUでの家族への看護実践が必要不可欠である。

そのためにNICU看護師が在宅移行支援に必要な知識を持ち、早期から家族への支援を実施することは、NICUに入院している子どもをもつ家族にとって、子どもとの愛着を形成するとともに在宅での生活をイメージすることができ、子どもの最適な療育環境である在宅へ移行することができると思う。

### 2. 研究の目的

本研究はNICU看護師を対象とした、NICUから在宅への移行を支える看護実践能力育成プログラムの開発とその評価を目的としている。プログラムは、NICUに入院している子どもとその家族の個性を重視した在宅生活に移行するための看護実践能力の獲得を目指すものである。そのために、研究期間内に以下のことを実施する。

1) NICU看護師の在宅移行支援における看護実践内容と必要な知識と技術について明らかにする。

2) プログラムの効果を評価するために家族看護実践能力自己評価尺度を作成する。

3) 1)の結果を参考にプログラムの内容を検討し、教育を効果的に行うために、ポートフォリオを活用したプロジェクト学習法を導入したプログラムの内容を検討する。

4) プログラムを実施し、導入前後の看護師の在宅移行支援に関する看護実践能力を評価し、その効果を査定する。

1)~4)を実施することにより、効果的な看護実践能力育成プログラムを開発する。

### 3. 研究の方法

1) NICU看護師の在宅移行支援における看護実践の内容と必要な知識と技術を明らかにする。

対象：NICU看護師 21名

方法：フォーカス・グループ・インタビュー (1グループ5人程度、面接時間は60分程度)

調査内容：NICU看護師が実践している退院支援の内容 NICU看護師が退院支援を行うために必要な知識と技術

分析方法：各面接の録音内容から逐語録を作成し、それぞれのグループの逐語録を精読し、

NICUにおける退院支援の実践内容、実践に必要な知識と技術に関連する文節または一文を単位として抽出し、要素的内容分析を行う。

2) プログラムの効果を評価するために家族看護実践能力自己評価尺度を作成し、信頼性と妥当性を検証する。

本尺度は、先行研究によって明らかにした熟練看護師が実践しているNICUにおける親子関係形成支援内容の質的研究の成果を基盤とし、新生児集中看護認定看護師らと質問項目の表現の適切性と内容の明確さ、回答のしやすさ、追加すべき質問項目の有無についての検討を行い、家族に対する看護職者の行動を問う質問58項目を作成し、5段階のリカート法として「いつも行っている(5点)」から「ほとんど行っていない(1点)」により尺度化した。

対象：協力を得られた6施設のNICU・GCUに勤務している看護師313名

分析方法：本尺度は、因子分析により構成概念妥当性、クロンバック信頼係数の算出より内的整合性を検討した。さらに本尺度の妥当性を検証するために看護師の経験年数等から既知グループ分析を行う。

3) 1)の結果を参考にプログラムの内容を検討し、教育を効果的に行うために、ポートフォリオを活用したプロジェクト学習法を導入したプログラムを作成する。

4) プログラムを実施し、導入前後の看護師の在宅移行支援に関する看護実践能力を評価し、その効果を査定する。

対象：対象：NICUに勤務する看護師約40名とする(20名×2クール)

方法：育成プログラム「在宅移行支援研修会」の受講前と終了後1か月、4か月の時点において調査を行い、プログラムの効果を査定する。

調査内容：一般性自己効力感尺度(GSES)、NICUにおける家族看護実践自己評価尺度、研究成果研修内容の活用、在宅移行支援に対する各自の課題への取り組みと目標の達成度等

### 4. 研究成果

1) NICU看護師の平均臨床経験年数は13.8年、NICU勤務歴は、平均11.7年であった。看護師が実践している退院支援内容は、【一般的な退院指導をする】【子どもや家族の状況にあわせた指導を行う】【時期に応じた育児指導を行う】【自律授乳を促す】【退院前に在宅を想定した練習をする】【院内における他科・他職種と連携する】【地域と連携する】【退院後の支援について説明し実施する】【指導体制の統一を図る】【虐待予防に関する支援を行う】【愛着形成の支援を行う】の11カテゴリが抽出された。NICU看護師が退院支援を行うために必要な知識と技術においては、【母乳育児支援】【社会資源や制度の理解】【子どもの発達や個性に合わせた看

護】【育児指導】【在宅療養を想定したアセスメントと育児指導】【子どもの経過を見通して早期から看護実践する力】【親が精神疾患の場合の退院支援】【自己の看護の振り返り家族看護の理解】【感染症に対する知識】【NICU に入院するリスクを理解する】【情報収集力とコミュニケーション技術】の 12 カテゴリーが抽出された。

2) 協力を得られた 6 施設の NICU・GCU に勤務している看護師 313 名に対して質問紙を配布し 184 名から回収した (有効回収率 58.8%)。対象者の年齢は、20-24 歳 28 名 (15.2%)、25-29 歳 43 名 (23.4%)、30 歳代 65 名 (35.3%)、40 歳代 34 名 (18.5%)、50 歳以上 12 名 (6.5%) であった。看護師経験は平均 11.4±8.3 年、NICU・GCU での経験は平均 5.5±4.0 年であった。看護基礎教育で家族看護を受講したものは 77 名 (41.8%) であった。因子分析、信頼係数の変化、I-T 相関分析を経て項目を選出し、主因子法によるプロマックス回転を用いた因子分析を行った結果、5 因子が抽出され、累積寄与率は 65.1% であった。第 1 因子「家族との援助関係の形成」を表す 13 項目、第 2 因子「家族が子どもの状態や特徴を認識するための支援」を表す 6 項目、第 3 因子「他職種と連携」を表す 5 項目、第 4 因子「子どもとの触れ合いを促す支援」を表す 6 項目、第 5 因子「子どもが新たに家族システムに参入するための支援」を表す 5 項目で構成され、各下位尺度のクロンバック 係数は 0.80 から 0.94 であった。NICU・GCU 経験年数と「他職種との連携」と有意な正の相関 ( $p<0.01$ ) が認められ、基礎教育での家族看護受講経験者は「家族をシステムに参入するための支援」を行っているものが多い傾向であった ( $p=0.62$ )。

3) 看護実践能力育成プログラム「在宅移行支援研修会」の内容を以下に示す。

	内容
第 1 回	オリエンテーション
	プロジェクト学習法について
	在宅療養生活の実際
第 2 回 (各自)	小児訪問看護演習
第 3 回	プロジェクト学習
	家族看護について
第 4 回	育児支援
	入院時期に応じた退院支援
第 5 回	社会資源の基礎知識
	地域における支援
	母乳支援
第 6 回	退院支援の実際
第 7 回フォローアップ研修 (第 6 回終了後 1 か月後)	リフレクション
第 8 回フォローアップ研修 (第 6 回終了後 4 か月後)	リフレクション

4) プログラムの参加者は各クール 19 名で合計 38 名であった。全てのプログラムに参加し、アンケートの回答のあった者は 30 名で、これらを分析対象とした。

プログラムの参加者はすべて女性であり、平均年齢は 36.4 歳、平均臨床経験年数は 14.0 年であった。

プログラムの効果として、自己効力感は変化が認められなかったが、家族看護実践能力は、「他職種と連携」( $p<0.01$ )「子どもが新たに家族システムに参入するための支援」( $p<0.01$ )において有意に向上していた。また、プログラムの内容の活用を終了後 1 か月と 4 か月比較すると、「家族看護」「育児支援」「入院時期に応じた退院支援」「社会資源」「地域における支援」の項目において有意に活用がされていた。参加者の自己の目標に対する達成度も、プログラム終了後 1 か月後より 4 か月後のほうが有意 ( $p<0.05$ ) に上がっており、教育プログラムの効果を確認することができた。また、参加者たちの課題に取り組んでいる経過のポートフォリオの分析から、自己の看護の振り返りに関して、在宅を想定した緊急時の対応についての指導の難しさ、自己の看護実践のみでの在宅移行実現が難しさという 2 点の課題が見出された。

(まとめ)

NICU 看護師対象に在宅移行支援に関する看護実践育成プログラムを開発し効果を認めることができた。本プログラムの結果から課題を抽出し、洗練したプログラムを検討していくことが今後必要である。特に参加者の看護の振り返りから抽出された 2 点の課題を追加したプログラムを構築していくことで、NICU における長期入院の問題の解決を目指すことが可能になると考える。

## 5. 主な発表論文等

【雑誌論文】(計 2 件)

藤野百合、中山美由紀、新生児集中治療室に子どもが入院した体験をもつ母親の育児に対する思い-NICU 入院から退院後 1 か月まで、大阪府立大学看護学部紀要、査読有、第 19 巻 1 号、2013、11-20

中山美由紀、「リプロダクティブヘルス」を目指した専門看護領域とのコラボレーション：家族看護の立場から、日本生殖看護学会誌、査読なし、第 19 巻 1 号 2012、61-62

【学会発表】(計 10 件)

Nakayama M, Tawa N, Inoue A, Okada A, Required knowledge and skills of nurses for families whose infants are transitioning from NICUs to home, The 18th East Asian Forum of Nursing Scholars, February 5, 2015, Taippai, Taiwan

中山美由紀、田和なつ美、岡田彩子、NICUにおける家族看護実践自己評価尺度の開発、第33回日本看護科学学会学術集会、2014,11,29,名古屋国際会議場(愛知県)

浅井桃子、中山美由紀、岡本双美子、重症心身障害児の家族の強みに対する訪問看護師の認識、日本家族看護学会第21回学術集会、2014,8,10,川崎医療福祉大学(岡山県)

Nakayama M., Tawa N., Inoue A., Okada A., Nursing Practice for Families with Infants Transitioning from NICUs to Their Homes, The 17th East Asian Forum of Nursing Scholars, February 21, 2014, Manila, Philippine

田和なつ美、中山美由紀、岡本双美子、NICUにおける親子関係形成の支援に関する熟練看護師の臨床判断、第33回日本看護科学学会学術集会、2013,12,7,大阪国際会議場(大阪府)

田和なつ美、中山美由紀、岡本双美子、NICUにおける親子関係形成支援に関する熟練看護師のアセスメントと実践、日本家族看護学会第20回学術集会、2013,9,1,静岡県立大学(静岡県)

Fujino Y., Nakayama M., Factors increasing parental self-efficacy in mothers with infants hospitalized in NICUs: The 16th East Asian Forum of Nursing Scholars, February 22, 2013, Bangkok, Thailand

Nakayama M., Fujino Y., Inoue A., The perceptions of home-visit nurses regarding difficulties caring for infants translating from NICUs, The 16th East Asian Forum of Nursing Scholars, February 22, 2013, Bangkok, Thailand

藤野百合、中山美由紀、NICUに子どもが入院した母親の育児に対する自己効力感を高める要因の検討 - NICU入院から退院後1か月まで、第53回母性衛生学会、2012,11,17,福岡国際会議場(福岡)

中山美由紀、藤野百合、NICU長期入院児の在宅移行を支える看護の検討: NICU看護のインタビューから、第59回日本小児保健協会学術集会、2012,9,29,岡山コンベンションセンター(岡山)

[図書](計2件)

中山美由紀、藤野百合、井上敦子編集、FCCN研究、NICU看護師が贈る家族へのサポートブック ぼくたち・わたしたちのこを知ってね 第2版、あゆみコーポレーション、2013(総ページ45)  
中山美由紀、藤野百合、井上敦子編集、

FCCN研究、NICU看護師が贈る家族へのサポートブック 育児についてのQ&A 第2版、あゆみコーポレーション、2013(総ページ32)

[産業財産権]  
出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]  
ホームページ  
FCCN研究会  
<http://plaza.umin.ac.jp/fccnfccn/>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

中山美由紀 (NAKAYAMA Miyuki)  
大阪府立大学・看護学部・教授  
研究者番号: 70327451

##### (2) 研究分担者

岡田彩子 (OKADA Ayako)  
兵庫県立大学・看護学部・准教授  
研究者番号: 10425449

岡本双美子 (OKAMOTO Fumiko)  
大阪府立大学・看護学部・准教授  
研究者番号: 40342232

小泉智恵 (KOIZUMI Tomoe)  
独立行政法人国立成育医療研究センター・研究所副所長付・研究員  
研究者番号: 50392478

##### (3) 連携研究者

( )  
研究者番号:

##### (4) 研究協力者

藤野百合 (FUJINO Yuri)  
田和なつ美 (TAWA Natsumi)  
井上敦子 (INOUE Atsuko)